

令和元年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部
鹿児島県知事表彰 優秀賞

「 災害から学んだこと 」

宇検村立阿室中学校 3年 ^{むらかみ}村上 ^{しおん}史苑

たった17日。されど17日……。僕はあの日を忘れることはないだろう。同時に、あんなに感謝の気持ちをもったこともないだろう。

それは、奄美がまだ梅雨真ただ中の6月21日の金曜日。僕の住む屋鈍集落は、大規模な土砂崩れで道路がふさがれ、完全に孤立した。

その日は、いつも通りに学校で授業をしていた。天候は雨。いや、大雨だった。それは「いつ、どこが崩れてもおかしくない状態」だった。そんなことが気がかりで、昼休みも過ごしていたが、案の定、「屋鈍に行く道の片側がふさがったので、今日の授業を切り上げる」という先生からの情報が入った。驚きと、「やっぱり。」という思いと、「僕たちは、無事に屋鈍に帰ることが出来るのか」という大きな不安が一気に僕に押し寄せてきた。

再び崩れる可能性がある、ということで母の車で帰宅をしたが、土砂崩れの現場では、必死に土砂を重機で動かす建設会社の方の姿が目に入った。「こんな大雨のときに、働いている人がいる。もしかして、僕たちのためなのか……。」僕はこの時、自分が無事に家に帰ることしか頭になかった。しかし、その後……。ついに恐れていたことが起こった。「全面通行止め」。被害は、その日だけで終わらず、地盤が緩んだ現場は、翌日も大量の土砂を動かした。そう、大雨と共に……。

幸い、この土砂崩れでけが人などは出なかったが、あの現場で働く人たちや、屋鈍に帰ろうとしていた人たちが、もし土砂に巻き込まれていたら、と考えると恐怖でしかなかった。また、僕たちの学校はどうなるのか、週末に奄美市内へ買い出しに行く人も多いのに買い物に行けず食料はどうするのか、不安はなかなか消えなかった。

翌日、屋鈍に閉じ込められた僕たちは、父と現場を見に行った。目の前に広がる光景に思わず目を見張ってしまった。幅50メートル、高さ20メートルに渡って崩れた土砂は完全に道をふさいでおり、僕の胸までほどある大きな岩も転がっていた。また、ネットのケーブルが切れていたが、幸い、電気のコードがギリギリでつながっていて、水道も止まっていなかったのがせめてもの救いだった。

しかし、現実と向き合うのはここからだった。不便な生活を送る僕たちは、助け合わなければならなかった。通勤や通学は、集落の人たちが船を出してくれた。最初の方こそ、みんなで遠足気分のように楽しかったが、雨の日になると、地域の方が小型バスを借りてきてくださり、林道のう回路を使って40分もの道のりを通った。2週目になると、移動販売車が集落に入ってきて、食料品も確保することが出来た。部活は、最終の船が出る時間前に切り上げることもあった。普段、当たり前前にやっていたことができなくなり、不便な生活を送るようになって、当たり前前にできる生活のありがたさを感じるようになった。また、改めて島の人の温かさ、優しさ、生きるたくましさを感じた。朝早くから夜遅くまで復旧のために頑張ってくださいる工事の方、電気、水道、住んでいる家、毎日通う道路、全てのことに「ありがたい」と感じた。そして、何よりも人は支えられながら生きていて、一人では生きられないことを知った。

今、道も通れるようになり、ネットも通じて、崩れる前と同じように生活が出来るようになったが、僕が経験した17日間を忘れることはなく、身の回りのものへの感謝の気持ちと、支えあうことの大切さを意識しながら、日々の生活を送っていきたいと思う。

災害で困ったことが多かったけれど、振り返ってみると、貴重な経験で、様々なことを学んだ。僕は来年、進学で島を離れるつもりだ。しかし、この経験は、今後僕が生きていく上で大きな支えになっていくに違いない。